

新型 CIVIC のデザイン

Styling Design of New CIVIC

奥本 敏之*

Toshiyuki OKUMOTO

林 明宏*

Akihiro HAYASHI

北島 義也*

Yoshiya KITAJIMA

田嶋 暢子*

Yoko TAJIMA

要 旨

新型 CIVIC は、時代を先取りする新しい価値「Clean Energetic」「Smart Technology」そして車に求められる基本性能でもある「Fun to Drive/Fuel Efficiency」をキーワードとして「Distinctive Smart CIVIC」というグランドコンセプトのもとに開発された。

エクステリアデザインは、「Clean & Energetic」をコンセプトとし、力強く透明感のある独自の動体モノフォルム骨格を表現した。インテリアデザインは、「Smart Futuristic Cockpit」をコンセプトとし、機能的で広々とした先進的コックピットを具現化した。また、それらの特徴をより引き立たせるカラーおよびファブリックを開発した。

ABSTRACT

The new CIVIC was developed under the grand concept of “Distinctive Smart CIVIC” following the keywords “Clean & Energetic” and “Smart Technology” (new values that anticipate the era) and “Fun to Drive/Fuel Efficiency” (the basic performance expected of a car).

The exterior design is based on the concept “Clean & Energetic” and expresses a unique dynamic monoform framework that looks powerful and clear. The interior design is based on the concept “Smart Futuristic Cockpit” and embodies a functional, spacious and advanced cockpit. The colors and fabric were also developed to bring out these characteristics.

1. はじめに

初代 CIVIC が 1972 年に誕生して以来、歴代 CIVIC は革新的なパッケージや、その時代ごとの先端技術、新しい価値を提供し続けて、アメリカを中心に全世界 170 ヶ国のお客様に愛されてきた。

先代の 8 代目 CIVIC は、流線形のシルエットと空間の広さや近未来を感じさせるインテリアを実現した「モノフォルム骨格」で個性的な新しい価値を提案した。メイン市場であるアメリカでは、ベビーブーマを初めとした多くの世代にその価値を支持されると同時に、特にスマートな生活を望んでいるジェネレーション Y に支持され、先進的テクノロジーや洗練された外観デザインが高く評価された。

今回のフルモデルチェンジでは、そのジェネレーション Y をメインターゲットとし、彼らのライフスタイルを豊かでスマートにするインタフェースの進化や、独自のモノフォルム骨格をよりダイナミックに進化させた新しい価値

*四輪 R&D センター

を造りだすことで、CIVIC を所有して良かったと感じてもらえる車造りを目指した。そのグランドコンセプトを Fig. 1 に示す。



*DQR: Durability, Quality and Reliability

Fig. 1 Grand concept

2. デザインのねらい

新型CIVICのデザインは、メインターゲットであるジェネレーションYのライフスタイルを豊かでスマートに過ごしてもらうために「クリーン」「スマート」「爽快」をキーワードとして開発した。

乗員が迷うことなく瞬間認知と直感操作できる新感覚の先進インタフェースと、快適にドライビングできるクラスを超えた広い室内空間を目指した。そしてその広い室内空間が外観からでもわかる大きなキャビンの特徴としたモノフォルム骨格を進化させ、独自の存在感と新しい価値のある動体モノフォルム骨格を目指した。

3. パッケージレイアウト

パッケージレイアウトは、存在感のある独自のモノフォルム骨格と、クラスを超えた広い爽快空間の実現を目指した「Distinctive Package」をコンセプトとした。燃費性能の低下を避けるため外形サイズは先代CIVICと同等とし、その中でコンセプトを実現するため、室内空間の徹底的な効率化に取り組み、開放感や前方のワイド視界による視覚的な広さ感を追求した (Fig. 2)。

室内空間の効率化をおこなうため、Hondaの車づくりの原点でもあるマンマキシマム・メカミニマム思想に立ち返り、特に人が広さを感じやすい部分の寸法を1 mm単位のこだわりで開発した。

アメリカ市場でのCIVICの使われ方を見ると主に通勤通学等、ドライバひとりでの使用がメインである。その前席空間の快適性やひとつ上の車格を感じてもらえるように、左右の乗員の間隔を10 mm広げると同時にドアライニングの薄型化により室内幅寸法を75 mm拡大した。

またグローバル市場においては後席空間も重要である。前後乗員間の距離は先代CIVIC同程度ながら、フロアの

低床化により後席乗員の足元スペース拡大が可能になり、かつ前席シートバック形状の工夫で膝廻りのスペースを広げ、ゆとりある後席空間を実現した (Fig. 3)。

さらなる広さ感の向上を目指し、フロントピラー下端を先代CIVIC同様に前方へ配置し、フロントピラーの細径化と断面形状の工夫により、よりワイドで開放感のある前方視界を確保した。

また、フロントクォータウィンドウをドア側に配置することで視界を広げ、インストルメントパネル上面から左右に抜けるような爽快で開放的な空間を演出した (Fig. 4)。



Fig. 3 Rear space



Fig. 4 Front space

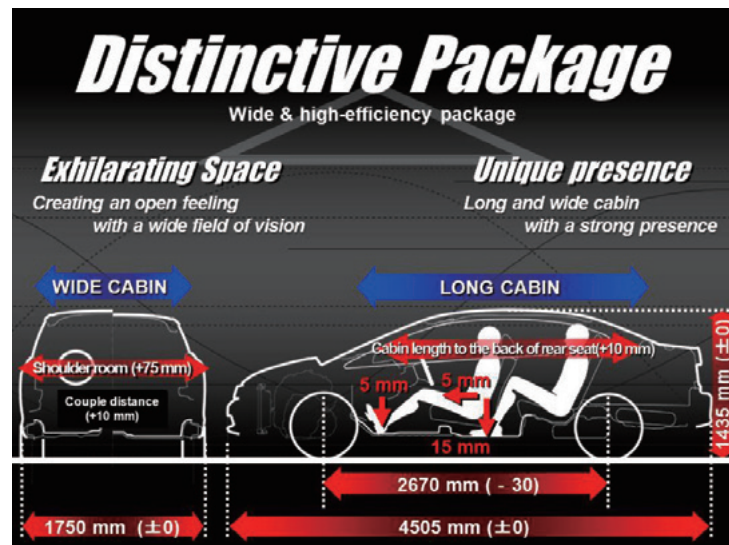


Fig. 2 Package layout

前方に配置したフロントピラー下端は後席から感じられる視覚的な広さにも寄与している。同時にフロントシートバック背面を小さく見える形状とすることで、後席からも広く開放的に感じる室内空間とした。

開発したモノフォルム骨格は、こうした爽快空間の演出のみならず、ロングキャビン、ショートノーズ、ショートデッキといった CIVIC 独自のプロポーションをも具現化している。

4. エクステリアデザイン

エクステリアは、力強く透明感のある独自の動体モノフォルム骨格「Clean & Energetic」をコンセプトにスタイリングをした。エンジンフードからキャビン、トランクへと流れていく造形の連続性を強調し、とぎすまされた一体感のある、シンプルでクリーンなモノフォルム骨格を基本モチーフとした (Fig. 5)。

このクリーンなボデーの内側から、エネルギーが湧き出てくるイメージでサーフェースを造り出し、張りのあるボデーの抑揚や躍動感を強調することで先代 CIVIC からより進化したデザインとした。それを特に表しているのが、サイドのショルダラインからリヤフェンダにかけての、面がねじれて張り出してくるダイナミックな造形である。

そして、ボデーサイド下部にキャラクターラインを1本走らせることで、軽快で伸びやかな印象を表現している。また、フロントピラー下端を前方に配置し、サイドウィンドウグラフィックスを前後に長く見せることで、室内空間の爽快さの表現や、低くスポーティなボデーのたたずまいを両立させた (Fig. 6)。

フロントビューでは、ワイド感を強調することで、ひとつ上の車格を感じさせるデザインを目指した。フロントバンパのコーナ部は、外に向かって張り出すような造形で、抑揚や躍動感、そして堂々とした存在感のある車格を打ち出した。フロントマスクは、フロントグリルとヘッドライ

トがつながった横一文字に通した意匠で、切れ長な表情と精悍な顔つきをあたえると同時に、先代 CIVIC からのアイデンティティも継承させ、一目で CIVIC とわかるフロントフェイスとした (Fig. 7)。

リヤビューでは、トランク中央から外側に連続性を持たせた張りのある造形と、サイドに廻りこませたリヤコンビネーションランプを配置することで、ラウンド感を強調した。同時にアウトレンズ外側コーナ部をエッジ形状とし、ボデーサイド面の空気の流れを最適化することで空力性能にも配慮したデザインとした。

リヤバンパはフロント同様コーナ部を外に向かって張り出させることで、ワイド感やひとつ上の車格を感じさせる躍動感のあるデザインを強調した (Fig. 8)。



Fig. 6 Final rendering



Fig. 7 Front design



Fig. 5 Exterior design concept



Fig. 8 Rear design

5. インテリアデザイン

インテリアは、先進的なドライバーズコックピットと、機能的で広々としたインテリア空間を目指した「Smart Futuristic Cockpit」をコンセプトにスタイリングをした (Fig. 9)。

コックピットパネルは、ドライバ視線がもっとも集まるメータ類を一番遠方に配置し、そこに吸い込まれていくような前後方向の勢を感じる造形とした。そして助手席側に向けてスプーンですくい取ったような大きなカーブのインストルメントパネルをデザインし、ドアライニングのアップ部とロア部ともに大きなネガ面を使うことでクラス最大級の室内幅を実現した。これらにより横方向への広がりを感じる爽快でクリーンな造形としている (Fig. 10)。

表示系と操作系の考え方は、スピードメータ等の車両情報系をドライバ正面側へ、オーディオ等の情報系をインストルメントパネルの中央部へと分けけた。重要度の高い表示系は、外視界に近い上方エリアに、操作系はドライバの手元近くに配置することで、より使いやすいインストルメントパネルデザインとした (Fig. 11)。

視認性に優れたマルチプレックスメータ上段には、多彩な情報をわかりやすく表示できる「Multi Information Display」を配し、燃費情報、オーディオ情報、運転支援情報等を表示する画面をシンプルなグラフィックデザインにす

ることで、走行時の視線移動を低減し、瞬間認知にすぐれた機能的な先進インタフェースへと進化させた。

また、オーディオ用ステアリングスイッチを Honda では初めての丸型十字スイッチ⁽¹⁾とし、画面の表示内容とスイッチの操作方向をイメージしやすいデザインにすることで、手元を見なくても迷わず直感操作できるスマートな操作系とした (Fig. 12)。

フロントシートは、サイドの腰を支える部分はしっかりと厚みを取りながらも、腰から上の肩へと伸びる部分をスムーズなラウンドシェイプにすることで、空間をより広く感じとれるようにした。

また、後席乗員の快適性を考えて、フロントシートの背面をそぎ落とした形状とすることで膝廻り空間が広くとれるよう工夫した。

リヤシートは、横基調のグラフィックで広さを強調しながらも、サイドのサポート部分を立体的な形状にすることで後席乗員の乗り心地も高めた (Fig. 13)。

収納については、基本的な位置やモジュールなどは先代 CIVIC の仕様を継承しながらも、USB 端子をコンソールボックスの中に新たに設定し、ミュージックプレイヤー等をつなげたまま収納できるように配慮した。また、走行中はステアリングスイッチでミュージックプレイヤー等の手元操作ができるため、音楽をスマートに楽しむことができる (Fig. 14)。

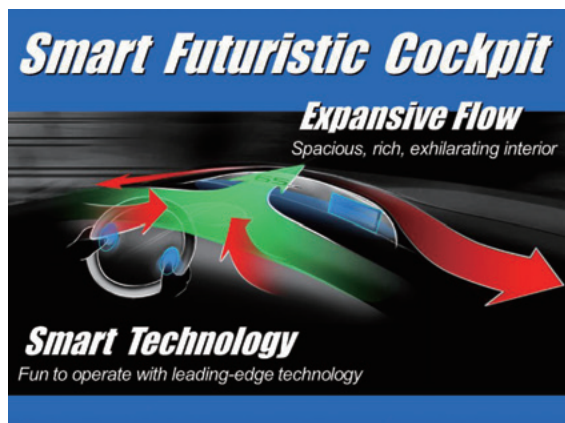


Fig. 9 Interior design concept

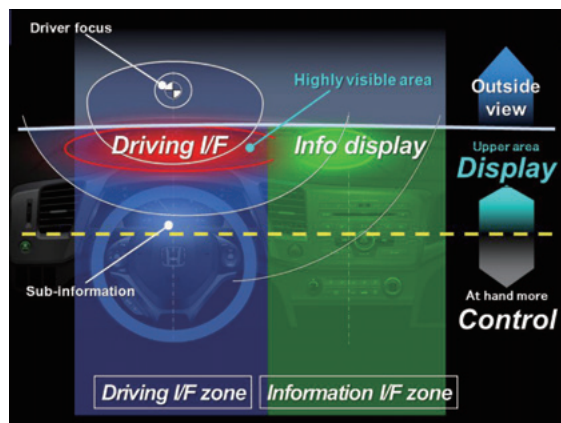


Fig. 11 Multi-information display concept



Fig. 10 Instrument panel



Fig. 12 Drivers cockpit



Fig. 13 Seat design

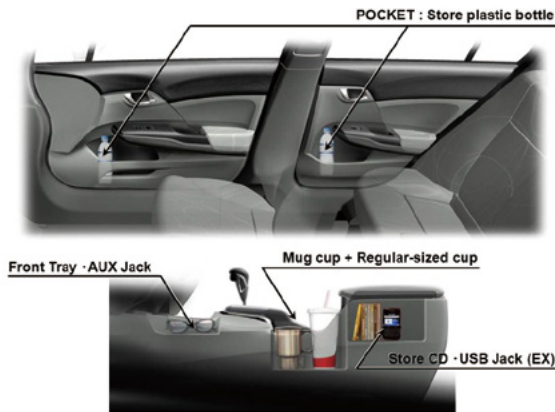


Fig. 14 Storage design

6. カラーおよびファブリックデザイン

「Clean & Emotional」をコンセプトに機能とデザインを融合させたコーディネート表現した。

エクステリアカラーは、ガラスのように澄んだ透明質感と硬質な金属の持つ力強さをキーワードに5色の新色を含めた11色のカラーラインナップを設定した。

テーマカラーの COOL MIST M. は、緻密な偏向パール顔料を配合したホワイトメタリックである。柔らかなカラーシフトと複層感のあるハイライトは、未来を感じさせると共にスタイリングの存在感を一層際立たせた。 GREEN OPAL M. は、環境に配慮した先進イメージをダイレクトに表現したハイブリット専用色である。高輝度アルミフレークで豊かな形状を強調し、ブルーからグリーンのカラーシフトで清々しい爽快感を表現した。

CRIMSON P., DYNOL BLUE P., スポーツグレード Si 専用の SUNBURST ORANGE P. は、さまざまなお客様の嗜好性を考慮し、それぞれに明快なキャラクターを持たせた色調とした。いずれの色も粗い高輝度アルミフレークを配合することで、深みのあるシェードと高彩度なハイライトで立体的な陰影を強調させた (Fig. 15)。

インテリアカラーは、先進性と安心感をキーワードに広々としたスタイリングを際立たせた4色のカラーラインナップとした。

テーマカラーである PALE MOSS GRAY 内装は、淡いグリーンをエッセンスとした新しいライトカラーである。明るくクリーンなコーディネートは爽快感と先進感を表現した。その他、明るいグレーを基調としたモダンなグレー内装、温かみのある上質感を表現したベージュ内装、力強いスポーティ感を表現したスポーツグレード Si 専用のブラック内装を設定した (Fig. 16)。

インストルメントパネルとドアアッパ部へは、有機的サーフェースと形状が同調した新しい概念の「ハイド&シーク・サーフェース」を採用した。ブレンドした二つの異なる有機的テクスチャーが、しっとりとした質感を表現し、形状や光の反射により時には独立に、時には重なって、さまざまな表情へ変化することが特徴である。この視覚的效果は広々とした室内空間に、より一層の広がり感と奥行き感を付け加えている (Fig. 17)。

シートファブリックは、手触りのよいスエード調トリコットに、フリーハンドで描いたような軽やかで躍動感あるライン柄のプリントを施した。シート全体に駆け巡らせた縦横無尽なライン柄はリピートを通常の3倍へと拡大し、ダイナミックさとシートスタイリングの広さを際立たせる表現とした (Fig. 18)。



Fig. 15 Exterior color image and line-up



Fig. 16 Interior color variation



Fig. 17 Surface design



Fig. 18 Fabric design

7. まとめ

初代 CIVIC が誕生し、世界中のお客様に愛され続けて 40 年となる。Honda 独自の革新的なパッケージと先端技術や新しい価値を提供し続けて、全世界 170 ヶ国のお客様に喜ばれてきた。

9 代目となる今回のフルモデルチェンジで我々は、「Distinctive Smart CIVIC」というグランドコンセプトを基に、デザインの開発に取り組んできた。力強く透明感のある独自の動体モノフォルム骨格、瞬間認知にすぐれた機能的な先進インタフェースを具現化することで、初代から受け継がれてきた独自の存在感と新しい価値をこの車に表現することができた。

今回の CIVIC はもちろん、CIVIC という機種が今後も 10 年 20 年と変わらず、世界中のお客様に愛され続ける存在になることを願う。

参考文献

- (1) 阿部正明: オーディオリモコン用ステアリングスイッチの操作性向上, Honda R&D Technical Review, Vol.23, No.2, p.63-65

■ 著 者 ■



奥本 敏之



北島 義也



林 明宏



田嶋 暢子